

九月十三日

昨日、一昨日とTVの前に釘づけになってしまった。NYワールド・トレード・センターとワシントンアメリカ国防総省へハイジャックされた旅客機が突込むという仰天すべきテロが起きたからだ。湾岸戦争の時は遠い砂漠の国で現実離れた電子戦争が引きこされて、私達もそれをTVの映像で、まるでコンピューターゲームのように眺めていた。

今度のテロは同様にTVの映像から知ることができたのだが、まるで湾岸戦争のそれとは異なっていた。良く知っているニューヨーク、よく知っているワールド・トレードセンターに、よく知っているボーイング767、757旅客機が体当たりして、映像なのに全てが生々しかった。

超高層ビルが主舞台になった映画の代表作はタワーリング・インフェルノそしてダイハード1等がある。古き良き時代ではフランク・ロイド・ライトをイメージさせるゲリー・クーパーの摩天楼があった。それらは良く出来た物語りであったが、人間と超高層ビルの物語りであった。人間が人間としてまだ描かれていた。今度のテロには人間が登場しない。ラディンというスーパーテロリストのグループの仕業らしいが、それも影に隠れている。突込んでいった旅客機も旅客機の形をしているが、それはニューヨークという巨大都市と比較して見てしまうので、その内に多くの人間が居るとは切実に感じられない。私はトマホークミサイルを実

見した事がないが、TVの映像でワールド・トレード・センターをブチ抜いて破裂するボーイング767は、ミサイルのようにしか見えなかった。そのミサイルの中に六〇数名の人間が居た、生々しさはTVの映像からは伝わって来なかった。しかしながらその映像は異様に生々しかった。コンピューターゲームの類のそぞらしさは異なる世界があった。

これは都市と砂漠の戦争なのだ。

その間にヒューマンな、つまり近代的な人間的スケールは介在し得ない。都市というイデオロギーと砂漠というイデオロギーが衝突している。

今の段階で（事件当日から三日目）犯人をイスラム原理主義者グループであると決めつけるのは早計であろうが、映像から受ける印象は極めて原理的なニュアンスがある。標的に都市と国家のシンボルが選ばれているからだ。資本主義市場のシンボル・ワールド・トレード・センターとアメリカ合衆国の国家権力のシンボル・ペンタゴンである。

このテロは二十一世紀そのものの基本的性格を暗示しているような気がする。ブッシュ大統領のTV映像は説得力が無かった。アメリカは国家の威信をかけて報復するのだろうが、それは原理によって超高層ビルに突込むという観念に対抗できるのだろうか。二一世紀は民族間戦争の時代だと予測する人もいるが、より端的には宗教（イデオロギー）戦争の様相を帯びてくるのではないか。まだうまく言えないけれど、それはキリスト教とイスラム教の戦いという枠をすでに超えて、都市という宗教的観念と砂漠が生み出す観念との戦いなのではないか。